



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

元日は人工透析休みにて夫と連れ立てばうから喜ぶ

古川 英子

山峡の里の秋の日いと寂し日の出は遅く暮るるは早き

小倉キミ子

息静め歌留多をとるに幼子と手が重なれば払ふもならず

目黒 富子

母の名を一度も呼ばず三か月母待ちし孫はみどり児を撫づ

新国由紀子

久びさにグループホームの孫問へば矢継ぎ早にて話止まらず

馬場 八智

病院の待合室に久に逢ふ同級生を誰ぞと問ふも

渡部ゆき子

吹き降りの豪雪の中歩み来て一足ごとに身をかたくする

関谷登美子

正月に団子さし置く玄閼に早も鳥きて啄みてをり

渡部ヨリ子

日に三度施設の姉を養ふる食事間近く落着かずをり

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

お茶啜る隣人二人春障子
待春や妻と登りし無言坂

修 一

立春や来るには来たが温度計
吹雪かれてかしく雑木の声を聞く

洋 子

凍餅の並べられてる星の下
一礼し仕事始めの薪を割る

一 穂

身にしむや術なく一人また逝けり
巧ちかけし納屋の軒下寒雀

味代子

赤き緒の標ありぬ杉林
立春や庭に降り立つ石敲

敦 子

体温計しかとしまつて柚子湯かな
冬ごもり墨絵の里に住み八十路

弘 子

雪解晴田上五尺の雪えくぼ
飴煮つまる馬眼魚眼や冴え返る

吉 児

人と会い人と話して寒明くる
久闊や句座のにぎわす桜餅

恒 夫

復旧の記事あり鉄路に雪解来る
しまき避け門借りたるか鳥の跡

幸 生

溜池にさぎなみ生れり初菫
一畝は新しき仲よ水雲和え

礼

鬼は外園児の声も弾みたり
辛抱の賜杯と綱の花が咲き

信

一滴に蒲生岳容れ軒氷柱
仏壇の花器の冷たき一周忌

順 子

粕汁やそつとほぐれて鮭の骨
歌留多取り負けぬ気負いの五歳の子

都